新しい年を迎えて

小坂町長　細越　満

令和６年の新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。町民の皆さまにおかれましては、輝かしい新春を迎えられましたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は、５月８日から新型コロナの感染症法上の位置づけが２類から５類に変更されました。法律に基づき行政が様々な要請・関与をしてきた仕組みから、個人の選択を尊重し自主的な取組を基本とした対応に大きく変わりました。３年以上にわたった新感染症は有事から平時に転換され、日常生活において規制や制約がなくなり、コロナ禍前の日常に戻ることを期待する一方で、ウイルス自体が消滅したわけではないので、基本的な感染対策の継続に努めていただきたいと思います。

このような状況の中、異常気象の影響等により、町民の安心安全を揺るがす事態も発生しました。１月から２月まで、中央地区の広い範囲で断水が発生しました。厳寒期の断水で、町民の皆さんには大変なご不便をおかけしました。一昨年８月の大雨が一因でありますが、今後も同様の事態が生じることが十分考えられるため、水道水の安定供給に向けて日々の維持管理を徹底してまいります。

秋にはクマの出没が相次ぎました。どんどん人里へ下りてきて、どこに出没しても不思議ではない状況でした。町では、被害に遭わない対策について情報配信メールや防災ラジオ、チラシ等で広報したり、パトロールや爆竹・ロケット花火による追い払いや猟友会の協力により檻を設置して駆除したりしました。また、檻を２基増設したり狩猟免許取得費用の助成制度を始めたりして、人への被害が出ないよう努めました。今後も野生動物等への対策は、強化していかなければなりません。

７月に開催した第１回日本山ぶどうワインコンクールは、審査総括の大橋健一マスター・オブ・ワインや、俳優の辰巳琢郎氏ら国内外に発信力を持つ審査員を招聘し行われました。小坂七滝ワイナリーからは、２点が金賞である紫（ゆかり）賞を受賞することができました。山ぶどうワインの認知度向上を図り、産地としての魅力向上とワイナリー事業を中心としたグリーンツーリズム推進による地域の活性化に、今回の経験を活かしていきたいと思います。

昨年10月の開業を予定していた「道の駅十和田湖」は、事務手続きの遅れから開業を延期しておりましたが、文化庁の認可を受け工事を再開しました。十和田湖への玄関口として、また地域ブランド「十和田湖ひめます」の認知度向上及び観光の回遊ルートの拠点として、年内のグランドオープン目指して事業を進めてまいります。

小坂高校が３月末をもって百余年の長い歴史に幕を下ろします。閉校は、地域の方々や卒業生、そして生徒にとっても寂しいことでありますし、町内から高校がなくなることによる影響は計り知れないものがあります。しかし、この小坂高校の栄光や精神は小坂町の歴史に残り、その輝きが失せることは決してありません。町では、春からすべての高校生が町外へ通うことになることから、高校生に対する新たな支援を始めてまいります。

町の将来像に掲げた「人と自然と文化を未来につなぐ魅力あふれるまち」の実現に向けて、これまで「子育て・保育」「健康・医療」「商工業・雇用」「教育」など各分野において、他の自治体にもひけをとらない種々施策を展開してきたと自負しております。しかしながら、その成果はまだまだ見えにくい状況にありますが、住む人が愛着を持ち、訪れる人が感動するまちづくりとなるよう、皆さまのご協力のもと、職員と一丸となって誠心誠意取り組んでまいる所存であります。

結びにあたり、町民皆さまの変わらぬご支援をお願い申し上げますとともに、ご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、新年のごあいさつといたします。